

# Glocal Tenri



6

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.11 No.6 June 2010

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

## CONTENTS

- ・ 巻頭言  
かんろだいの前に座することが・・・  
／深谷忠一 ..... 1
- ・ 天理教教理史断章 (54)  
城尾文書④  
／安井幹夫 ..... 2
- ・ 天理教海外伝道の資料 (6)  
上海伝道関連史料⑥  
／深川治道 ..... 4
- ・ 天理異文化伝道の諸相 (70)  
コンゴ伝道に見る異文化接触 [36]  
／森 洋明 ..... 5
- ・ 世界平和のための宗教対話 (20)  
カソリック界：アフリカで伸びる教勢と  
その問題点  
／山口英雄 ..... 6
- ・ 今日の時代における宗教批判の克服学 (18)  
信者一人ひとりの主体的権利を宗教に  
／金子 昭 ..... 7
- ・ 「二つ一つ」の環境学 (31)  
環境先進国から何を学ぶべきか②  
原発は温暖化対策の切り札か？  
／佐藤孝則 ..... 8
- ・ ハワイ人とキリスト教：文化と信仰の  
民族誌学 (15)  
文化構築主義  
／井上昭洋 ..... 9
- ・ 現代ジェンダー論展望 (11)  
特性論は幸せをもたらすのか？  
／金子珠理 ..... 10
- ・ 天理スポーツ (1)  
はじめに  
／難波真理 ..... 11
- ・ 図書紹介 (52)  
『ジェンダー視点から戦後史を読む』  
／堀内みどり ..... 12
- ・ English Summary ..... 13
- ・ おやさと研究所ニュース ..... 14  
平成 22 年度公開教学講座「現代社会と天理教」(1)  
／研究報告会「LGN の最近の重点活動」／新刊案  
内／「教学と現代 VII」開催のお知らせ

## 巻頭言

### かんろだいの前に座することが・・・

おやさと研究所長 深谷忠一 Chuichi Fukaya

神殿の東西南北の礼拝場と教祖殿の御用場と合殿の総畳数 3,695 畳。その周りの回廊その他が 16,000㎡。中庭と東西南北礼拝場前の神苑に並べられた 4 人掛けのパイプいす 13,700 脚。その全てを埋めて余りある 12 万人が帰参された今年の 4 月 18、19 日の教祖誕生祭と婦人会創立百周年記念総会でありました。

海外からも両日を目指して、台湾から 1,137 人、韓国 892 人、タイ 100 人、ネパール 53 人、フィリピン 35 人、シンガポール 21 人、香港 29 人、ブラジル 586 人、コロンビア 20 人、アメリカ本土 449 人、カナダ 22 人、フランス 21 人等、総計 33 カ国・地域から 3,607 名（海外部掌握分）の帰参者がありました。

ハワイ伝道庁管内からも 133 人という大勢の帰参者があり、昨年、この婦人会総会への“決起の集い”の講師として当地に派遣された小生の家内も、安堵の胸を撫でおろしておりました。婦人会員が一致団結して活動したこの度の総会の賑わいは、正に「親里ぢば」なればこそでありました。

しかるに、一方、おぢばがえりをしたくても出来なかった人も大勢ありました。

小生の関係のブラジルの布教所の教友 6 名を含む 13 名の団体は、昨今の米国政府の南米からの旅行者への差別的扱いにより、ロンドン経由でのおぢばがえりにルートの変更を余儀なくされ、その結果、途中でアイスランドの火山の噴火に直面。ロンドンの手前のマドリッドで降ろされて待機するも、飛行機は日本に向かうことができずに、サンパウロに戻らざるを得ませんでした。途中で戻った人はもちろん、日本で歓待すべく準備を進めてきた婦人会員の落胆も言葉にはならない程大きなものでした。

しかし、こういう語り草になるような特異な例でなくても、この世紀の祭典に帰参できなかった人は大勢います。というより、帰参できなかった人の数の方が多いのです。この度の 12 万人の帰参者と申しても、天理教信者が 100 万人というなら 10 分の 1 余、200 万人というなら 20 分の 1 余の信者さんしか

帰っておられないことになるのです。

つまり、今回、時間的、政治的、経済的、家庭的、身体的要件が満たされておぢばに帰れた幸運な人より、そうでなかった人の方が圧倒的に多いのです。他の行事なら、不参加の人のことまで慮る必要はないかも知れませんが、おぢばがえりは信仰の核心にふれる問題ですから、帰った人だけで盛り上がりそれで終わりではいけない。帰りたくても帰れなかった大勢の人たちへ、どのようにおぢばでの出来事・感動を伝えるのか、それが今後の課題だと思います。

『アメリカ伝道庁五十年史』(昭和 59 年発刊)の序文で三代真柱様は、

「私達は誰しも悩みを持つとき、をやに接して心を立て直す道を探る。自分の望む時、すぐにかんろだいの前に座せる者は幸せであるが、それが世界中の教友のほん一握りに満たなくなる時代に備えて、今から思案して道を付けかけねばならない。」と述べられています。

今回、火山の噴火で U ターンを余儀なくされた人たちは、来る秋季大祭への帰参を目指してがんばっております。しかし、信仰が堅固であれば誰しもがおぢばがえりができるといわけではありません。種々の条件を鑑みると、「かんろだいの前に座せることができない教友」が一握りではない時代が現実になりつつあるのも間違いのないことだと思います。

三代真柱様は前述のお言葉に続いて、

「かくの思案から、私は、明治 20 年の出来事を振り返って、教祖が、扉をお開き下されて世界ろくぢに踏み均しに出られた親心や、私達が何処に住んでいても国国処の教会へ足を運べば、教祖のお膝元に座って頼れる親心を、即ち、存命の御守護の理の思案を、もっと深く掘り下げ、今日迄以上に足元を見定めながら物事を進めなければならないのではなからうか。」

と述べられています。“グローカル”を誌名とする本誌においてこそ、ぢばの理、存命の理、教会の理をさらに深く掘り下げ、グローバルな信仰の有り様についての“道しるべ”を提示できるように、研鑽を重ねなければならないと思う次第であります。